令和3年度多文化共生の担い手連携促進研修会
一般財団法人自治体国際化協会
2021年12月9日（木）11:05-11:20

地域日本語教育における ICT活用の事例と課題

公益財団法人浜松国際交流協会（HICE）
内山夕輝

本日のメニュー

1. 令和2年度の取組
2. 背景
3. 実施内容
4. 課題
5. まとめ

令和2年度実施

大学と地域の連携事業

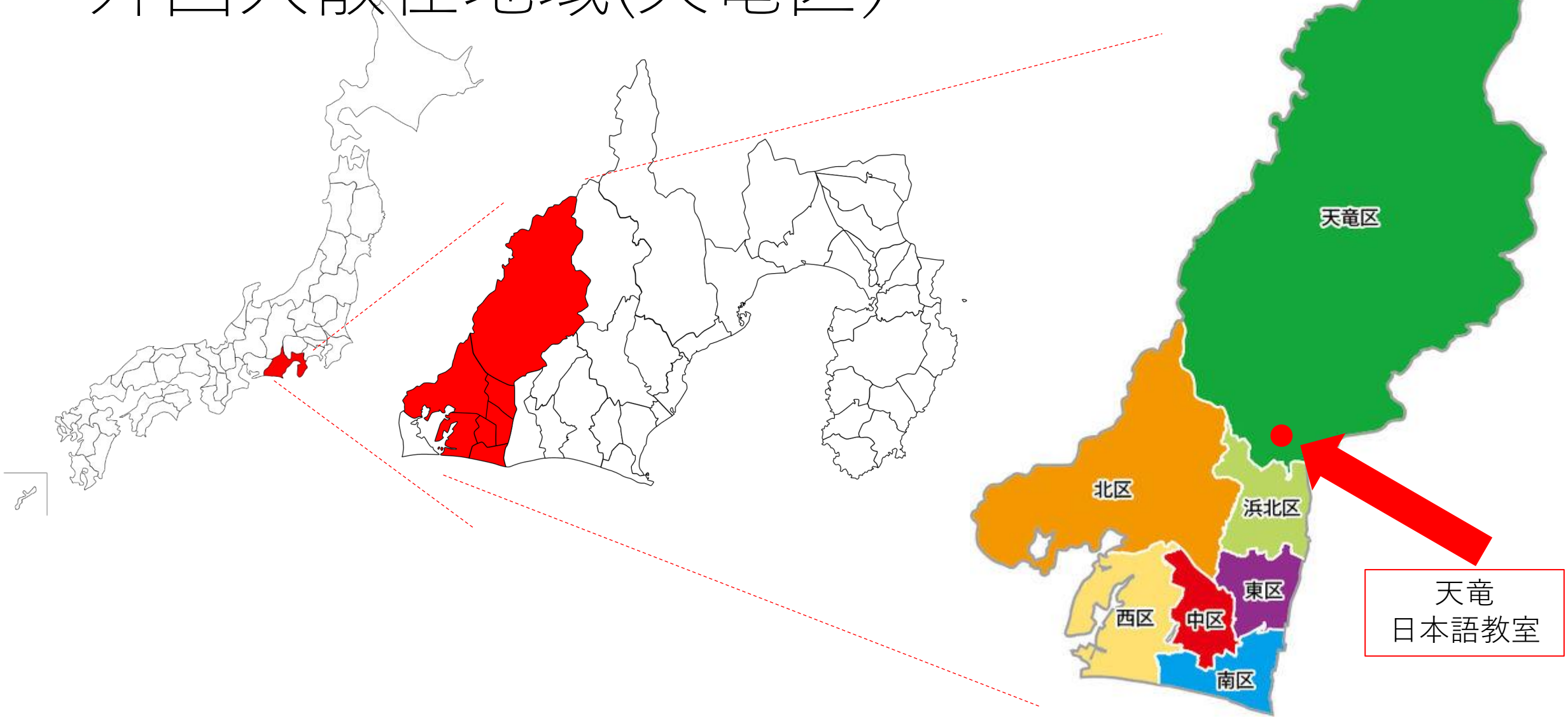
ICTで実現！

学習者、大学生、中山間地日本語教室の三方良し

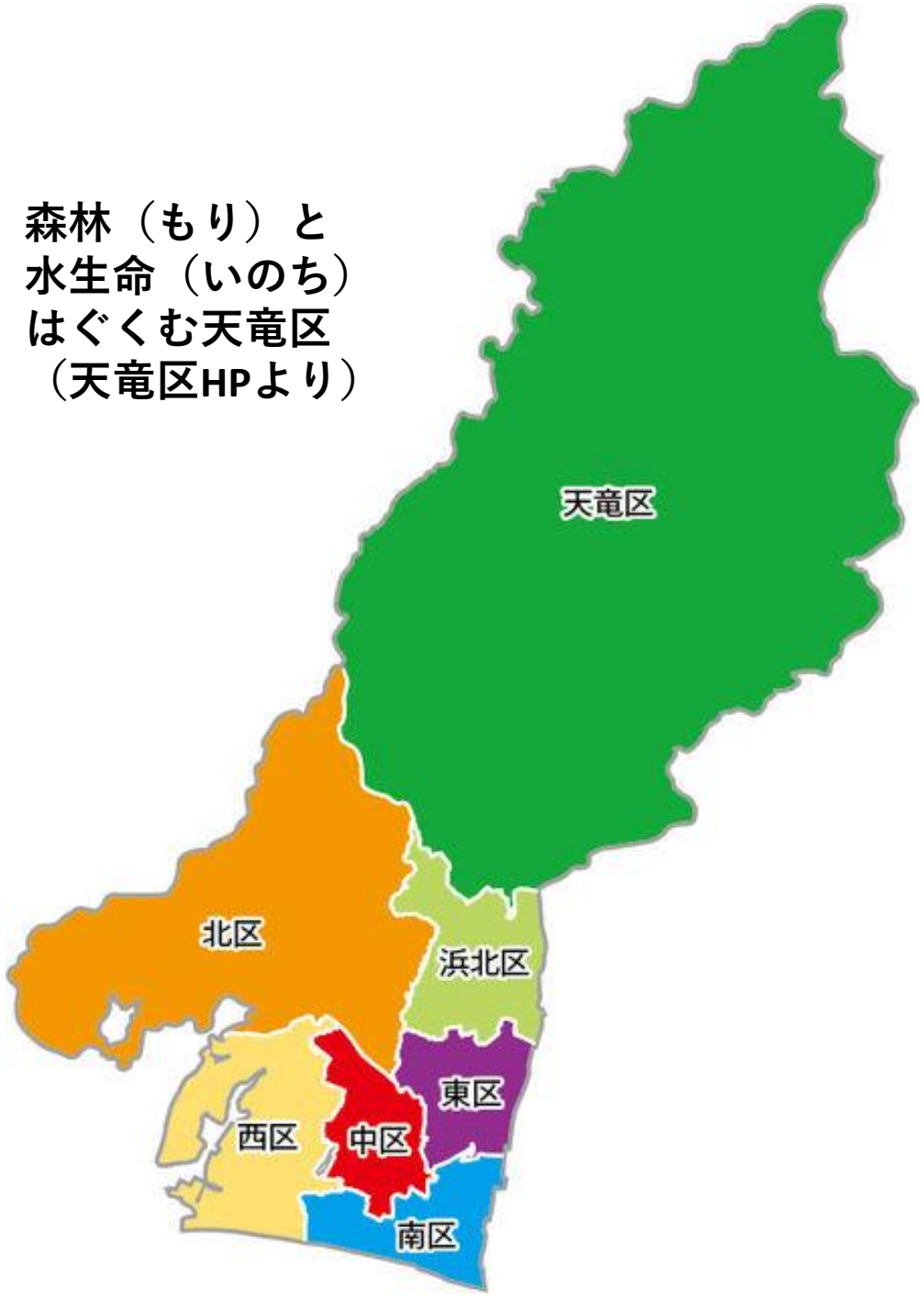
総務省　多文化共生事例集(令和3年度版）P.42-43

https://www.soumu.go.jp/menu_seisaku/chiho/tabunkakyousei_suishin_r03.html

外国人集住都市にある
外国人散在地域(天竜区)



森林（もり）と
水生命（いのち）
はぐくむ天竜区
（天竜区HPより）

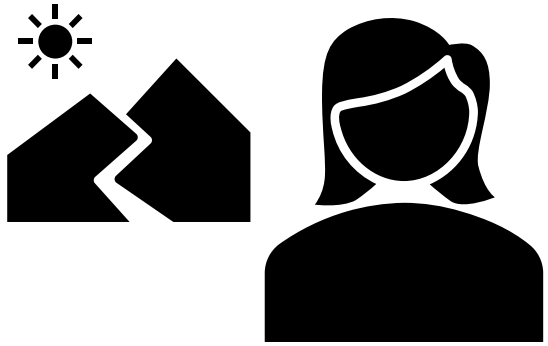


天竜区の概況
浜松市HPより抜粋して掲載

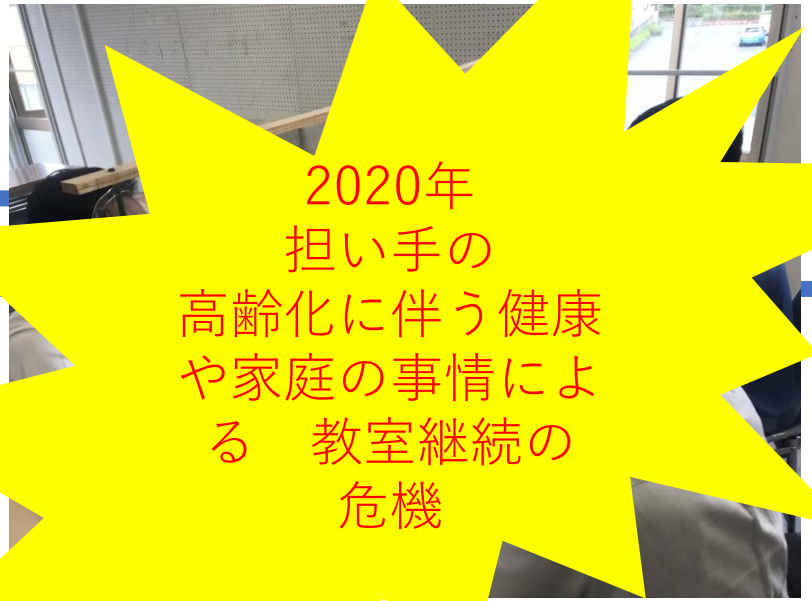
区分	天竜区	全市
面積	943.84平方km (浜松市全域の60.6%)	1,558.06平方km
世帯数	12,214世帯 (浜松市全体の3.5%)	346,110世帯
人口	27,227人 (浜松市全体の3.4%)	797,938人
外国人人口	413人 (浜松市全体の0.05%) (天竜区全体の1.5%)	25,593人 (浜松市全体の3.2%)
人口密度	28.8人／1平方km	512.1人／1平方km
65歳以上の構成比率	45.36％	27.77%

世帯数および人口は、住民登録【外国人登録を含む】(令和3年4月1日現在)
住民基本台帳より算出（令和2年10月1日現在)
https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/tn-shinko/ward/tenryuku/kusei/h28.html

天竜日本語教室 (2011年～組織合併)

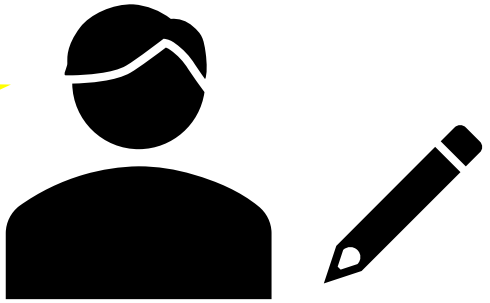


日本語ボランティア
4~5人



2020年
担い手の
高齢化に伴う健康
や家庭の事情によ
る　教室継続の
危機

本語学習支援・交流



日本語学習者
4~6人

新たな支援者を募集したが、集まらない
地理的な条件が人材確保に影響を与える

5年先を見据えて、ICTを使った授業の検討を始める

地域日本語教室におけるICT活用方法の検討

録画配信	オンライン(100%)	学習者が教室に集まり、ボランティアがオンラインで寄り添い支援	学習者が教室に集まり、日本語教師がオンラインで授業を実施
学習者が好きな時に学ぶことができる ＋	学習者もボランティアも移動の負担がない ＋	ボランティアの移動の負担がない ＋	日本語教師の移動の負担がない ＋
録画教材の準備が必要 －	学習者、ボランティアともにICT環境が必須 －	ICT環境やスキルがあるボランティアの確保が必要(複数人) －	日本語教師の確保が必要 －
学習支援を通じた交流ができない －	コーディネーターにICTスキルが必須	コーディネーターにICTスキルが必須	日本語教師による「1対多数」の教室開催が可能 ＋
居場所としての教室がなくなる －	居場所としての教室がなくなる －	学習者とコーディネーターの顔の見えるつながりは維持できる ＋	学習者とコーディネーターの顔の見えるつながりは維持できる ＋

ICT活用におけるこだわり

１．録画授業を学習者が見る自習タイプにはしない。

せっかくあるリアルな場（教室）をすべてオンラインに切り替えたくはない（顔の見えるつながりの大切さ、散在地域にいる外国人の見える化）

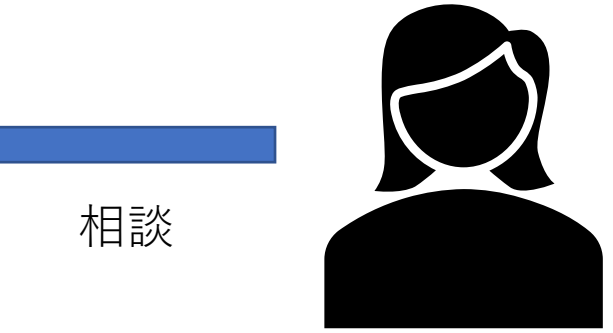
２．問題の発端は教室存続の危機→学びの場を継続するためには、どういう人材が必要か。

ボランティアが行っているマンツーマンでの学習支援をオンラインで行うには、結局、数の力が必要。日本語教師が行う一対多数の形式ならば、指導側の人材は少数でも運営ができるのでは。

→日本語教員養成課程を指導する大学教員に相談

大学との
地域連携事業

大学生と教員



相談

コーディネーター

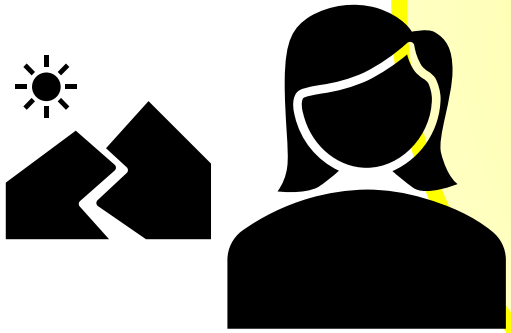
【こだわり３】
大学と学習者の2者だけがつながることは望まない

【こだわり１】
録画授業を学習者が見る自習タイプにはしない

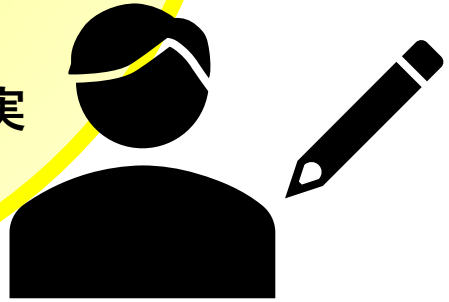
【こだわり２】
一対多数で日本語指導ができる人材の確保

ICTを活用した
地域日本語教室

これまでのリアルな場（教室）は継続。
大学生側が授業をオンラインで配信。
学習者とボランティアが集まる形式。
これにより、県内各地にいる大学生も参加が可能に！
緩やかな移行のため、月1回実施。

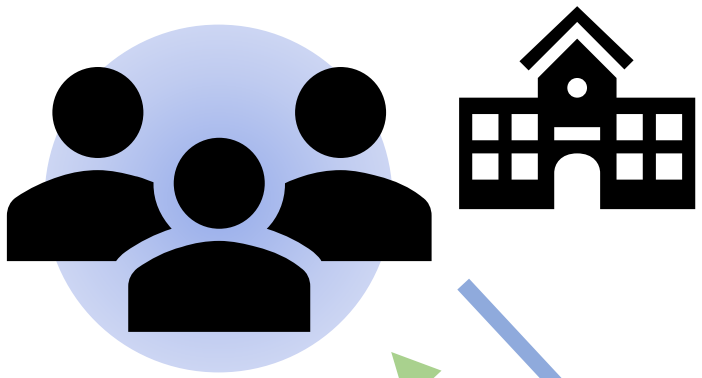


中山間地の
日本語ボランティア



日本語学習者

令和版
三方よし



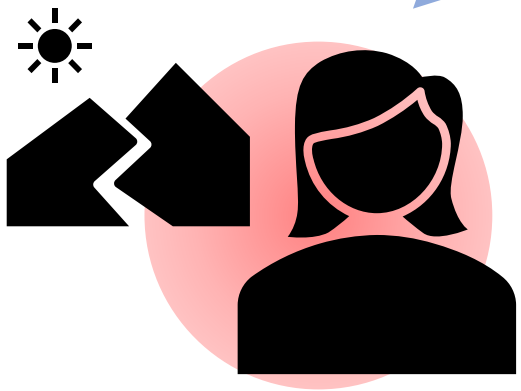
大学生と教員

日本語指導研修
の場の提供

スキル
アップの
機会

日本語指導の研修
同世代の交流
多文化共生意識の涵養

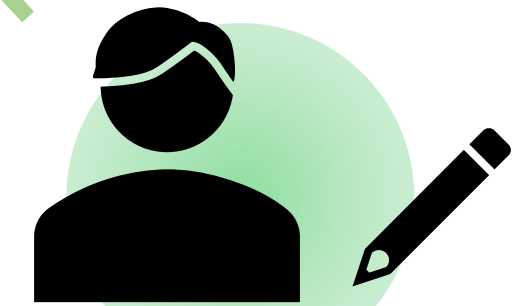
日本語学習
同世代の交流



中山間地の
日本語ボランティア

交流

日本語学習支援・交流



日本語学習者

３．実施内容
授業に関わった人

- 大学生8名（外国語学部6名、経営学部2名）
- 大学教員2名（外国語学部、経営学部）
- 学習者5~8名（タイ、インドネシア、ベトナム、ブラジル）
- HICEコーディネーター　1~3名
- 日本語ボランティア　3~4名

➢外国語学部の学生は、日本語教員養成課程の科目を履修。日本語教師の金のたまご。
➢大学生が教案・教材作成⇔大学教員がフィードバック(複数回)
➢大学教員は授業での見守り、授業後の振り返りも実施した。
➢HICEコーディネーターは現地との調整、機材設置、授業中の学生フォロー等を行った。

※授業の詳細については、常葉大学外国語学部紀要第38号に投稿中。2022年3月掲載予定。
浜松市との連携による地域日本語教育の試み―令和２年度常葉大学地域交流連携推進事業―
坂本勝信・谷誠司・山下浩一・内山夕輝・染葉麻愛美

授業の内容

目標：職場や生活に生かせる日本語を身につけてもらうこと

テキスト：国際交流基金の『いろどり　生活の日本語　初級1』

内容：

前半「全体授業」学生2名が『いろどり』を用いて授業実施。

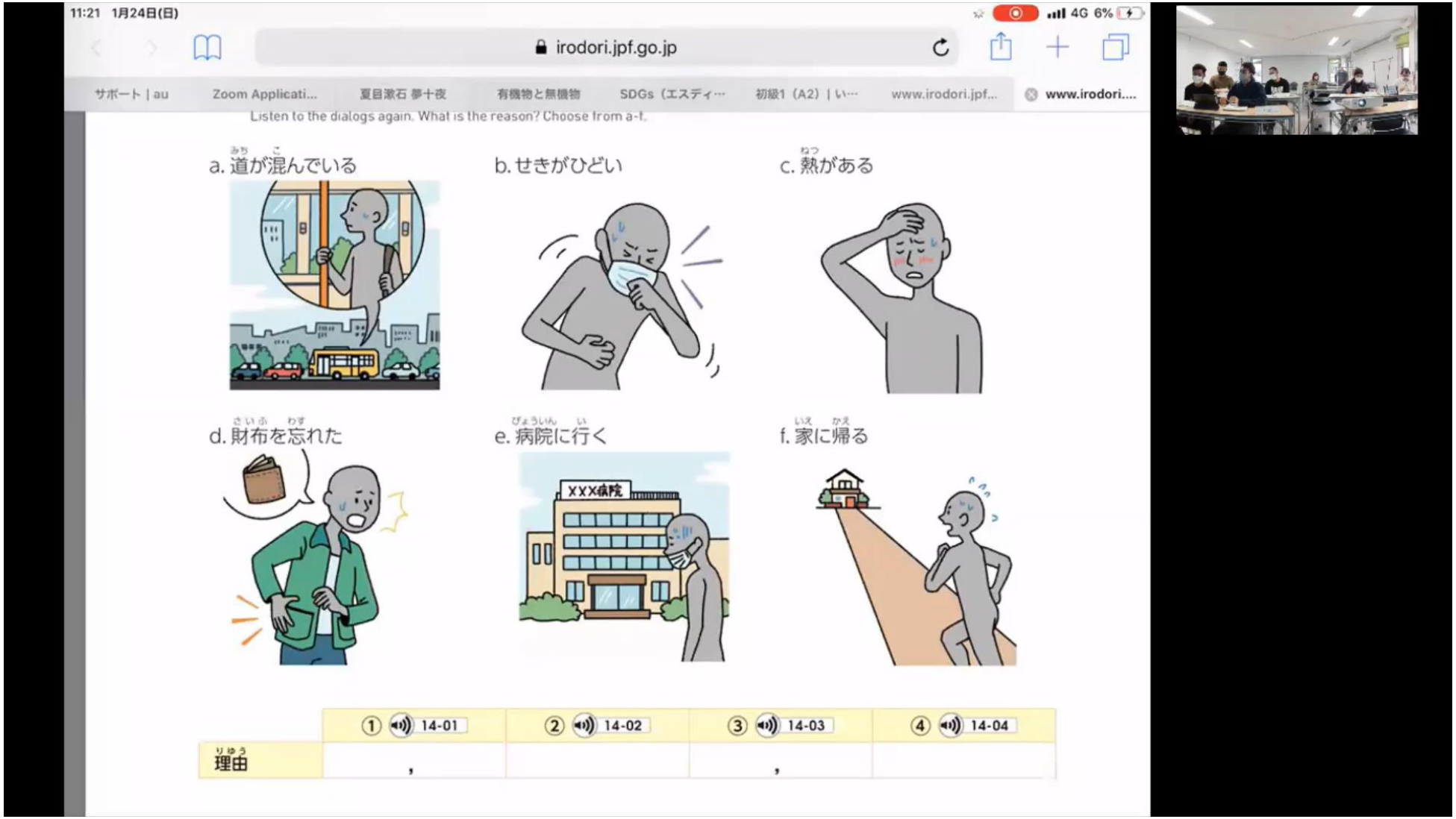
後半「グループワーク」Zoomのブレイクアウトルームを利用して、学習者1、2名と日本人大学生2～3名で、①全体練習で導入された文型の応用練習と②Show&Tellを実施。

①では、『いろどり』で提示された文型を、日本人大学生とのやりとりを通して、アウトプットする練習を行った。

②のShow&Tellでは、学習者と大学生が互いを知りあうことを目的とし、自分の好きなこと等について聞き合う時間とした。その後、全体授業に戻った際に、各グループから1名ほど発表してもらう機会を設けた。

※授業の詳細については、常葉大学外国語学部紀要第38号に投稿中。2022年3月掲載予定。
浜松市との連携による地域日本語教育の試み―令和２年度常葉大学地域交流連携推進事業―
坂本勝信・谷誠司・山下浩一・内山夕輝・染葉麻愛美

授業の様子(2021年1月の動画)
グループワーク後の全体復習



課題

- 大学との具体的な連携方法について(機材の購入分担、大学生への謝金や大学教員への指導謝金、ボランティアへの謝金等の費用分担、事務等の役割分担、コーディネーター(必須）の配置等）。包括連携協定をどう活かすか。
- 大学の日本語教師養成課程の科目を学ぶ学生にとって、地域日本語教室での活動が教育実習として単位になると良いが…。
- 多文化共生を学ぶ場・機会として、大学生と「生活者としての外国人」とボランティアのつなぎ。
- 月1回（ICT活用教室）＋月3回（従来の教室）のペースをいつまで続けられるか。従来のボランティアの気持ちも。

ご清聴ありがとうございました。

公益財団法人浜松国際交流協会(HICE)

内山夕輝

hice14@hi-hice.jp